
 學 會

第 6 回岡山醫科大學産婦人科同門會集談會

昭和 10 年 11 月 24 日岡山醫科大學産婦人科教室に於て開催し、閉會後
荒手茶寮に於て懇親會を催せり。演説抄録下の如し。

 1. 脳下垂體「レントゲン」照射療
法の成績

中村眞太郎君

月經痛、出血性「メトロパチー」、無月經の更年期
障害、月經週期異常、乳汁分泌不良等に對する
計 152 例の脳下垂體照射成績を述べたり。

2. 「トリコモナス」療法

浅羽武一君

治癒困難なる帶下に對しては「トリコモナス」を
検出すべき事、若し存在せば「デベガン」の如き特
殊療法の必要なる所以を述べ。

3. 婦人科化膿疾患の療法に就て

山本英雄君

最近 Barjaktarovic により附屬器膿瘍の一新療
法として「リパノール」灌注法即ち陰穹隆部より
穿刺し可及的大量の膿汁を吸引し、後之と同量の
「リパノール」溶液を注入し、最後に吸引せし「リ
パノール」溶液が透明になる迄反覆本操作を施行
する法を應用して好果を擧げ得たりと報告したる
に依り、余も亦之を「バルトリン」氏腺膿瘍に應用
して唯 1 回の本行施行により其の後何等の後處置
を施す事なく全治せしめ、更に之を若干例の附屬
器膿瘍に應用して佳效を奏し得たれば、本法は之
等婦人科的化膿疾患或は乳腺膿瘍等に應用して然

る可き方法なりと思惟せられたるを以て茲に簡單
に御紹介し、御追試を得ば幸甚とするものなり。

4. 重複畸形兒分娩例

 (赤堀淳太郎君
石川昂君(演))

母體は 38 歳の 5 回經産婦、既往の分娩は總て異
常なく、今回の妊娠に限り初期より呼吸困難、食
慾減退及び全身の疲勞感を訴へてゐる。診察の結
果は妊娠 8 箇月、双胎及び羊水過多症で即日分娩
誘導(Bougie 挿入及び Atonin の少量注射)を行
つた所、間もなく翌朝何等の介助を要せずして容
易に臀部癒合重複畸形兒を足位(4 足を並列した
まま)で娩出したるもので産褥經過も極く平滑で
ある。兒は生後數分にして死亡。外觀上 4 脚の中
央に癒合した 1 箇の男性々器を有し 1 兒を兎唇他
兒は Spina bifida を有し互に後向きに臀部で癒合
された状態である。解剖の結果、1 兒は右肺を缺
如し左肺は 1 葉、他兒は右肺が 1 葉で共に睾丸は
未だ下垂の途中にあり脊椎は第 4 腰椎で V 字型に
癒合し興味ある事に本來の骨盤は兩兒共に認めら
れずして大腿骨端が結締織中に遊離してゐる事は
甚だ珍奇な點である。

 5. 子宮腔部「ワクチン」注射に依る
淋疾の療法

伊藤正道君

子宮腔部に淋菌「ワクチン」を注射し、淋疾を治癒せしめんとする方法は既に1923年獨人 C. Bucura 氏に依り創意せられ、淋疾治療に良好なる結果を得たり。

余は前記 C. Bucura 氏法に倣ひ、感作「ゴノワクチン」を用ひ、初め 0.05 cc より行ひ、0.05 cc 宛増量し、全量約 1.0 cc に及べり。型の如く子宮腔部を露出し、「リパノール」液を以て清拭し、「ツベルクリン」用注射器、 $\frac{1}{2}$ 皮下針を用ひ、腔部の前唇又は後唇に出來得る限り深く挿入したり。文献に徴するに相當の副作用あるものの如く記載もあるも、余の例に於ては殆ど之を見ず、推奨するに足る方法と信ず。

6. 臍帯眞結節ノ1例

北 義 保 君

24歳の1回經産婦、妊娠「ネフローゼ」及び蛋白性網膜炎のため妊娠10箇月の初期に早産術を施して無事健康児を分娩したるに新産兒の臍部より25.0 cmの所に臍帯の眞結節あるを認めたり。

臍帯の長さ48.0 cm、胎盤の大きさ、重量正常なり。其の他臍帯の附着部に異常なし。

此成因を考ふるに妊娠6箇月の時、高所より轉落せしことあり。其の他妊娠中羊水過多もなく、胎動も普通なりしと。よつて妊娠中の轉落により偶然形成されたるものにあらずやと想像す。

標本を供覽す。

7. 妊娠中「レ」線により診断し

得たる無腦兒の1例

北 義 保 君

33歳の2回經産婦、妊娠10箇月初期の患者を診察するにあたり、外診によりて胎動著明なるも胎位及び頭部を確知し得ず。内診するに子宮口未だ開大せず、指頭を通じ得ず、前進部は頭部の如

きも柔らかき部分と、堅き小突起様のものを觸知し判然せず。以上内外診によるも、胎位及び頭部を確知し得ざるを以て「レ」線撮影をなすに無腦兒妊娠と診断し得たり。人工早産術によりて分娩を遂げたるに果して無腦兒なりき。妊娠中「レ」線により無腦兒と診断し得るは當然のことなるも、臨牀上興味あるものなり。（「レ」寫眞供覽）

8. 「ハクラン」の小經驗

八 木 齊 君

最近獨乙製の「スプーマン」にならつて日本で作られた泡沫體療法である「ハクラン」を使用して、10回餘りで頑固な淋毒性の帶下が減少し淋菌も其の數を減じ比較的速かに治癒し且傳染等の危険もなくいい方法であると思ふ。尙ほ「ハクラン」使用に際しては先づ頸管内の粘朶な分泌物を除去しておくことが必要で自分は膀胱注用用の嘴管を注射器につけて充分に分泌物を吸引除去するのりとしてゐる。

尙ほ少女の腔炎には硝酸銀液で洗滌後この「ハクラン」を腔内に挿入しておくこと非常によいやうである。

9. 無腦兒妊娠の診断

齋 藤 治 君

昭和2年以來本日まで遭遇せし3例の無腦兒の中、第1例は骨盤端位にて心音の聴取困難の他所見を捉へ得ざりしも第2、第3例に於て診断上の要點として（1）觸診上は浮球感強き部を宮底にふれ骨盤端位と考ふべきに兒心音は正常頭位よりも著しく低し。（2）内診所見殊に頸管内に挿入せし指尖に骨邊を直接觸れ之を衝突すると強き胎動起りて内診指尖に衝突する如き感あり、此内外診は無腦兒診断の一徵候かと考へらる。第3例は「レントゲン」撮影にて分娩1箇月前に確診せしも

のなり。

尙は無脳兒妊娠にては妊娠中毒症即ち悪阻及び妊娠腎の症状は認めず、尙は無脳兒妊娠にて頭位なるときは分娩は遅延する如し、第2例は37日、第3例は16日豫定日を遅延せり。

10. 子宮破裂と弛緩性出血の症例

に就て

陶 守 三 思 郎 君

最近遭遇せる子宮破裂は2例共過熟兒に産婆乃至非専門醫が陣痛催進劑を過量又は不當に注射して起り胎兒は私が穿頭娩出したり。第1例は1週後人工肛門を作り次で腸吻合術を施し萬死に一生を得、他は腹膜炎を起し3日後に鬼籍に入る陣痛催進劑は過量を戒める要あり、余は0.5宛2回に分ちて用ふ。

弛緩性出血の第1例は胎盤娩出前のもの他の2例は娩出後のもので、何れも及ぶ限りの處置をなしたるも3例共死亡す。これに關する詳細を述べたり。

11. 完全發育を遂げし卵巣妊娠の

1例

松 岡 賢 一 君

完全に發育を遂げし卵巣妊娠例、恐らく臏胞内着床と思惟すべき1例に就き既往症臥床經過並に手術經過を述べ標本を供覽す。

12. 興味ある經過をとりし2—3の

悪性脈絡膜上皮腫例に就て

馬 場 武 夫 君

變位性脈絡膜上皮腫の4例の臨牀的經過及びZ. A. R. の消長に就て述ぶ。上記4例中、3例は變位性(1は外尿道口の右側及び腔入口部の右側に、他

2例は左廣靱帯内に發生し、臨牀上子宮外妊娠中絶様症状を呈せるものなりき。

13. 變位性脈絡膜上皮腫の2例

南 川 欣 司 君

最近經驗したる變位性脈絡膜上皮腫の2例の中1つは治療上に、他は診斷上に興味を覺えますので左に御報告申します。

第1例 25歳の初妊婦、葡萄狀鬼胎妊娠經過中子宮よりは1滴の出血を見ざる中に既に腔壁尿道外口附近に脈絡膜上皮腫を發生し、妊娠第3箇月末に至つて突然該上皮腫より大出血を起したものであります。

手術的に上皮腫の切除並に鬼胎の手術的排除を行つたものであります。今度は間もなく子宮腔内に上皮腫を發生し腹式子宮全剔出を餘儀なくせられたが、囊に切除されたる腔壁の上皮腫存在部に再び同様の腫瘍發生の兆がありましたので之に臭化「ラヂウム」50.0 mgを隔日に應用しました所一層出血を増強しましたので、遂に該腫瘍の完全剔出を行ひましたが貧血甚だしく數日後に鬼籍に上りました。後から考へますと「ラヂウム」貼用の代りに危険を侵しても2度目の腫瘍完全剔出を行ふべきであつたと思ひます。

第2例 23歳の初産婦、妊娠3箇月にて不完全流産、其の後出血止まず、入院掻爬手術を行ふ。經過良好にして術後10日目退院せしが、退院後23日目より再子宮出血ありとて來院す、診するに子宮の大きさ正常、附屬器にも異常なし。種々の止血劑注射、内服等あらゆる治療を加ふるも效なく遂に1箇月に及ぶ。其の間右側下腹痛發作を發する事3回、第4回目の疼痛發作は頗る激甚、鎮痛劑の注射を餘儀なくされた位であつた。そこで念の爲「ツオンデック、アシユハイム」反應を検した所、強陽性の成績が現はれたので右側喇叭管妊娠

と診断、再び入院せしめて開腹した所、意外にも右側廣韌帯内に小指頭大の上皮腫を發生して居るのを見て直ちに腫瘍と共に子宮を膈上部より切斷しました即ち子宮外妊娠と相似たる症狀を呈したる變位性上皮腫の1例であります。

14. 「イレウス」の2例

赤堀淳太郎君

妊娠第9箇月の一婦人平素便秘を有する人にて早朝便所に行きて誤つて倒れて腹部を打撲して直後激痛鼓腹を來して開腹したるに移動性巨大S字狀結腸が外力により又妊娠により結腸捻轉症による「イレウス」なることを確認したるにより60cm切除せし一治癒たり。

第2例は子宮化膿性周圍炎を経過したる後約5箇月を経て其の治癒癍痕により突然迴腸部の捻轉を起して105cm切除して迴腸横行結腸吻合術を行ひ全治したり。

上述の事實により産婦人科醫も腸外科に就て平素より一定の知識と技術を養ふことが肝要なることを感じたり。

15. 妊婦骨盤徑線に就て

關場代五郎君

妊婦骨盤徑線は當該婦人に於て常に一定不變のものにあらずして、妊娠初期より分娩期に近づくに従ひ漸次延長する傾向を有す。余は6年半の長期に亙り年齢17歳より39歳迄の初妊婦352名につき、妊娠初期より分娩期に至る迄20日乃至1箇月の間歇をおき、他人の手を煩はすことなく余自ら同一骨盤計を以て外骨盤計測を行へり。

余の統計によれば何れの骨盤計線も妊娠初期より分娩期に近づくに従ひ多少延長を來すも、特に余の注意を拂へるは外結合線にして、若き骨發育期の初妊婦に於ては高年の初妊婦に於けるよりも其の延長度著明なり。而して其の延長程度は平均0.5乃至1.2cmの間にあり。高年の初妊婦にては一般に變化甚だ僅少なり。此徑線延長の原因は

第1. 妊娠時に起る腦下垂體及び副甲状腺の機能亢進により、骨と軟骨との境にある發育帯に廣き骨の新生帶生ずるに由來し、(Loeschke, Archiv. f. Gyn. Bd. 96. 1912)

第2. 耻骨聯合及び薦骨腸關節の韌帶及び滑液膜に妊娠により血管新生し、漿液性浸潤及び軟化を起し、關節機能は變化を呈し、其の移動性増加す。此状態にある關節は妊娠子宮の増大につれ亢進し來る骨盤内壓により多少の移動を起し、以て徑線の延長を招來せるものなるべし。

16. 「ホルモン」劑使用に關する2—3の注意

八木日出雄君

近時性「ホルモン」の發見と共に臨牀上の應用も頓に盛んとなれり。然れども、所謂舊製劑たる臓器「エキス」と異り、其の作用は著しく選擇的、特殊的のものなれば、自然それが適應に嚴ならざるべからず。濫用により却つて副作用を大となし所期の効果を擧ぐる能はざるに至る。即ち卵巢腫胞「ホルモン」、腦下垂體前葉「ホルモン」、卵巢黃體「ホルモン」等に就き、夫れが作用點、用量、使用時期と月經週期との關係を述べ臨牀上の参考に資せり。